中川勇治先生をお送りして

江　口　　修

中川先生をお送りするにあたって一言を草するに私が適任かどうかは疑わしいところではありますが，私と先生との浅からぬ因縁に免じてお許し願いたいと思います。

その因縁の第一とは，先生を最初にお見かけしたときに遡ります。私が大学へ入学した昭和四十四年は東大安田講堂封鎖解除に引き続いて学園紛争が全国化した年で，宮澤賢治の描く世界の手がかりがあるかもしれないと単純に考えて，私が入学したのは東北大でした。仙台市の西方青葉山の麓に広がる東北大教養キャンパスは駐留米軍が残していったかまぼこ型兵舎や将校宿舎そしてチャペルをそのまま利用したものでしたが，理科実験棟と一部教官研究棟は近代的な建物となっていました。いわゆるバリケード封鎖の対象となったのがこの建物でした。フランス語を選択した私は教室では中川先生とお会いすることはできませんでしたが，ドイツ語を選んだ友人たちから先生のドイツ語力の凄さは聞かされておりました。騒然たるキャンパスを駆け回っておられた先生のお姿を思い出すにつけ，少壮気鋭のゲルマニストとして研究に打ち込もうとされていた先生にとってこの紛争が大いに苦痛であり，研究時間を奪われることに暗然たる思いをされておられたであろうと拝察されます。そのためか，ほどなく静かな環境を求められてか山形大学に移られました。しかしながら，この学園紛争を立場を違えながらも同じ場で体験した者同士として，私は先生に対しはなはだ勝手ながら親近感を禁じえません。さて，話が若干前後しますが，先生は私にとって東北大学文学部の大先輩でもあられます。その俊才ぶりを早くから発揮されDAAD留学生としてドイツに行かれたことは伝説として長く語り継がれておりました。そして帰国後博士課程に一年在籍されたのち先生が最初に赴任されたのが本学でし

た。したがって本学を定年退官なさった先生は俗な言葉でいえば「出戻り」をされたのです。先生をその気にさせたのは本学教授会挙げての懇望であったとお聞きしております。

因縁の第二は本学での先生との再会です。十年ほど仙台で過ごしたのち機会を得て私が本学に赴任したとき，今は東洋英和女子大におられる目黒土門先生と中川勇治先生という大先輩お二人を前にまさに駆け出しの私は身の縮む思いをしたのですが，先生の昔と変わらぬ凛とした雰囲気に触れた瞬間，永遠の青年という言葉は先生のためにあるのだという感を深くしました。その後，親しく接していただけるようになってからは先生の別のお顔も知ることができました。ひとつはその豪放磊落をまさに体現したお酒，正確に言えばビールの召し上がり方です。赴任後ほどなくして酒席をご一緒させていただきましたが，ドイツのビヤホールの雰囲気そのままに朝方まで二人して盛り上がったことは忘れられない思い出です。その後短大部主事など要職につかれるようになりさすがに往年の勢いには届かなくなられましたが，先生が発せられる第二次大戦後の旧制と新制のないまぜになった大学で培われた自負と新生の意気に溢れた青春の息吹を懐かしく思い出される方は多いことでしょう。もうひとつは先生の飽くことのない探求心です。生涯一貫したムジール研究をはじめとして，先生の個別作家研究の背後にある浩瀚な知識の一端をかいま見させていただけたことは，職場の同僚として接していただけたがゆえと今さらながら僥倖に感謝するのみです。先生は小説という表現形式の起源とその展開についてヨーロッパ全体を精査される壮図をお持ちだったと拝察しますが，折りにふれつぶやかれるようにして口にされていたドイツのみならず英仏の作家や批評家の名を繋いでゆくと小説というジャンルの文学における生成発展の見事な見取り図が浮き上がってくるのです。そしてそのいずれも原著で丹念に読み込まれておられました。なぜか日本ではヨーロッパ以上に各国文学同士の垣根が高いようですが，先生にはぜひとも御高著『ドイツ近代小説の展開』（郁文堂，1988年）を超えて，世界規模での小説の生成を一冊にまとめあげていただきたいと切に望みます。

最後に，先生の意外な一面をご紹介させていただきたいと思います。これも私の赴任まもない頃のできごとですが，当時小樽に北方舞踏派という暗黒舞踏系の一派が居を構えていました。今もある広く名を知られている居酒屋が当時彼らの舞台兼生活拠点でしたが，そこでふと目にした公演パンフレットに先生のお名前と激励文が載っていました。その文章は一読して先生のものだと分かるものでしたが，論文では接することのできない奔放な表現に思わず目を見張ったものです。コンテンポラリーアートへのその暖かな目配りと深い理解を知るにつけ，先生がいっそう大きく見えてきたことを思いだします。そこには先生の柔軟で繊細な文学の享受者として感性が輝いていました。この北方舞踏派を通じては小樽在住の一原有徳氏という偉大な芸術家を知ることもでき，思うに私の小樽赴任はすぐれた邂逅のときであったようです。こうした僥倖に今一度感謝するとともに，どうか中川勇治先生，これからもどうぞご自愛の上ご研鑽にお励みください。